

「目標・内容の構造化・表形式化」に関して

秋田喜代美(学習院大学) 2025/10/14

目標における見方・考え方 と柱ごとの目標

目標

(柱書)

(見方・考え方)を働かせ、(学習過程)を通して、(資質・能力の趣旨)資質・能力を次のとおり育成することを目指す

(資質・能力の柱ごとの目標)

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	② 学びに向かう力・人間性等

1) 柱書として見方、考え方を示すことによって、この教科の本質となる資質能力が何であるのかを明確にすることができる。

2) 含まれる要素として以下が挙げられているが、

① 当該教科等が扱う事象や対象は大きな分野であり、② 当該教科固有の物事を捉える視点、③ 当該教科固有の考え方や判断の仕方を簡潔に書くのがよいのではないかな。

→この見方考え方は、新任教師にわかるというだけではなく、子供たちとも共有しわかるようなものであってほしい。

3) 学びに向かう力については、①当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度を特に自己調整的視点から大事にし、②情意・感性も教科固有面を簡潔に記すのが良いと考える。

表形式による構造化と中核的概念について

知識及び技能に関する 統合的な理解 XXXXXXXXXXXXXXXX	思考力、判断力、表現力等の 総合的な発揮 XXXXXXXXXXXXXXXX
知識及び技能 ・XXXXXXX ・XXXXXXX	思考力、判断力、表現力等 ・XXXXXXX ・XXXXXXX

「中核的な概念の深い理解(仮称)と複雑な課題の解決(仮称)」はいずれも学術、特に認知科学や学習科学の用語ではあるが、一般に親しみが無い。

現行との連続性を感じられる書きぶりとするのが重要ということからの変更には賛成である。

と同時に単に連続性ということだけではなく、押さえてほしいのは、中核的概念や複雑な問題解決がめざす「統合的な理解」と「総合的な発揮」という考え方である。それが深い理解、深い処理、深い相互作用による深い理解への過程を示すと考えられる。

中核的な概念は、個別の宣言的な知識ではなく、より高次のメタ的な知識、概念であるが、大事なことはそれは中核的な概念を得るということだけではなく、知識技能を統合していくプロセス、推理し関連付けながら知識を統合、知識の協働構築プロセスが重要であるというニュアンスが伝わるのが、大事と考えられるからである。

また「総合的な発揮」ということが、個別の能力の発揮だけではなく、思考力・判断力・表現力の過程を総合的に発揮できる学習活動の文脈はどのようなものであるのかを考えデザインすることの大切さを示すものとする。

表形式による構造化

表形式に構造化する表現は、資質・能力の一体的育成の可視化と資質・能力の深まりの可視化として、教科内容での資質能力系統性と深まり、発達を示すものとなっている。

並行、並列の在り方も2つのパターンの選択で教科特性が生かせる点で望ましい。

ただし表形式はセルごとの列挙箇条書きになるのでそのつながりをイメージできるような本文が必要である。学びそのものは前内容と後続のつながりの中で生まれる。そのつながりの工夫が教科書や学習資源のデザイン、各学校のカリキュラム編成で行われることが大事である。

「高次の資質・能力」を検討する上での チェックポイント(案)

【C 深い学びを実現する単元づくりを助ける観点】が特に教師にとって有効である。

教師が単元構想時に、「知識及び技能の統合的な理解」と、それにぶら下がる個別の「知・技」、「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」と、それにぶら下がる個別の「思・判・表」とを往還して参照した際、単元を通じて児童生徒が追究する本質的な「問い」を構想する上で参考になるか

→本質的な問い単元を貫く問いが、児童生徒の思考過程の側面から考えられているか、生徒にとってその問いは、自分事の問いになりえるのか？、生徒がその観点を見通しを持てているか、振り返りにおいて利用されているか。知識を統合的でき、かつ自分でメタ的に表現できるような活動が組み込まれているか？

・教師が単元構想時に、「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」と、それにぶら下がる個別の「思・判・表」とを往還して参照した際、論述・レポート・発表・作品製作等、単元を通じて児童生徒が資質・能力を総合的に発揮しながら取り組む課題を構想する上で参考になるか

→生徒自身が見通しをもって自律的に調整できるような過程が含まれる文脈、自分で振り返りに使えるようなルーブリックが共有され、アウトプット表現の共有検討ができるようなものになっているか

内容の精選・選択は、これから10年を見通して、見方・考え方と目標という各教科の本質をとらえて行われるべきである。精選・選択の原理として、生成AIをはじめとする予測不可能な急激な変化の中でも10年後にも押さえておくべき概念や能力を含むものであるかという点である。自立した学習者（自己調整）のためには、メタ認知、方略的行為、学習意欲によって目的意識を持った学習が必要。

人間にしかできない思考や表現、感性をとらえるとともに、各教科が培ってきた伝統文化を大事にするという視点が必要である。

この時に新任教師の声や児童生徒の観点は、余白を生むために必要と考えられる。